

久野島での夜の催物の演出も練った。

事前の研究を下調資料集にまとめた。松下村塾を調べたグループは、「松下村塾には規則はなかった。『規則がないからと言って自由放埒、禽獣夷狄に墮してはならず、老荘的放達になってはならない、誠実、忠直にして疾病艱難には扶け合い、力役事故には一致して一身の手足の如くふるって労役するべきである』これはわれら名大附にそのままいかえる事が出来るしこの旅行に関しても言えることである」と紹介し、本校の校風の「自由」について思いをめぐらした。

〈現地では〉萩はみそれまじりの荒天であったか、体験的学習は出来たようである。萩の市民との交流を通じて生徒一人一人の総合力かためされた。事前準備とのズレへの対処、グループ内に病人が出た時等も良くも悪くも生徒の「日頃」が出た。十分成果を得たグループ、チームワークや事前準備が悪く成果を得られなかったグループ等その研究成果はさまざまである。

広島での原爆資料館館長の高橋氏の話に数多くの生徒は深く打たれたようである。或る生徒は研究旅行の感想文の中で「『戦争とはなまやさしいものではない、あんなものにあこがれをもってはいけぬ』と言われたその言葉の一つ一つに重みを感じられた。あの広島でみたものはこの先ずっとぼくの胸からはなれないだろう」

〈研究のまとめ〉 研究報告集を出した。引率教官も感想文を寄せた。それ以外の事後指導は全く行われなかった。

3. 総合的指導はできたか

この研究旅行の反省を総合学習の場としてどう活用したかという観点から行なうならば次のような事がいえる。

総合学習の場として旅行をとらえる事で、引率教師の旅行への指導方針かできた。(たゞ旅行を事故もな

く無事に終えるというだけでなく)だがその方針は漠然としており、何もかも識り込んだだけで、浅く広いものになってしまった。

事前準備の段階で、授業中に旅行に関係した内容を扱ったのは、ヒロシマに関する事のみであったが、これを中心として、たとえば、この萩—広島—大久野島と展開された研究旅行を総合学習の場としてさらに深くとらえるために、日本の軍国主義的歴史の認識あるいは平和探求の旅として一貫した大テーマの下に位置づける事ができたのではないか。吉田松陰の思想は明治維新では尊皇攘夷として、その後は富国強兵として受け継がれ、その帰結が大久野島での毒ガス作りであり、ヒロシマに投下された核兵器である。この萩(松下村塾)—ヒロシマ(原爆資料館)—大久野島(毒ガス工場や毒ガス貯蔵庫跡)という事物を通じて、日本の軍国主義の発生からその帰着したところをあとづけ、さらに現在の状況を鋭く分析する事ができたのではなからうか。学習の形態としては、萩の自主的グループ学習からヒロシマでの教師主導形そして大久野島でのレクリエーションというアクセントをつけ、また生活指導の面では、萩での社会人としてのあり方、帰属する自己集団と他集団との関係、大久野島での自己集団と個人との関係を体験する場としてとらえ、それに適した指導内容が考えられた。これらの系統性を有機的に結びつけて総合化していく事が客観的には要求されていたがそれが明確化されないまま実施日をむかえてしまった。

総合性とはあれもこれもではなく、総合性を何にむけて発揮していくのか、その「何か」を明確にする事が大きな課題である。

すなわち修学旅行を総合学習の場としてとらえる場合まずその総合性を発揮するテーマは何かを、そのコースにあわせて調査研究する事が最初のそして最大の課題となるのである。

Ⅱ 学 習 と し て の 旅

白 井 宏

実際に旅をする生徒達の意識とは大きく食い違っているであろうことを承知していながらも、高校2年生の“修学旅行”を、“研究旅行”とする。生徒の意識と食い違っているということ自体は、恐らく誤りではないだろう。その食い違いを埋めて行く作業が教育、そういう定義も成立し得るからである。

事 前 に

生徒の意識を高めるというよりも、それと折れ合う形で、コースや日程が決まる。

旅行の中心になる萩における丸1日のグループ研究については、全体が21の班に分かれ、それぞれが研究

テーマを持ち、事前の下調べをし、コースを決めた。旅行のしおりとは別に、下調べ資料集をプリントしたが、その目次を掲出すると、次の通りである。

- | | |
|-------------|------------------------|
| 1. 萩の実態 | 2. 史跡めぐり |
| 3. 萩と偉人の関係 | 4. The history of Hagi |
| 5. これが萩だ! | 6. 松下村塾 |
| 7. 民芸品 | 8. 萩の人々の意識調査 |
| 9. 小萩人形 | 10. 萩焼き |
| 11. 萩のキリシタン | 12. 萩やき |
| 13. 高杉晋作 | 14. 藍場川の歴史と現在 |
| 15. 寺めぐり | 16. 萩の味覚 |
| 17. 夏みかんと民話 | 18. 萩焼きとその歴史 |
| 19. 吉田松陰 | 20. 萩焼き |

教師の側でも、この旅行を研究的に取り組むために引率教員7名と、広島だけに特別参加する1名(倫社)その他3名(地理・地学・日本史)、計10名が、それぞれ1文を草し、資料集に掲載した。これもその題目だけを次に示す。

- | | |
|---------------------|---------------|
| 1. 研究旅行に望む | 2. 研究旅行に望む |
| 3. 旅前随想 | 4. 秋吉台鐘乳洞について |
| 5. 萩の歴史と文学 | 6. 萩：地理的視点から |
| 7. 明治維新と萩 | 8. 原爆とわたし |
| 9. 原子爆弾の原理 | 10. 旅行と健康について |
| 11. 原子力の平和利用と放射能の問題 | |

大きっぱに言い切ってしまうと、この事前研究の味は、「百科辞典」から1歩も出ていない。しかし筆者はそれはそれでよいと考えている。そうでもしなければ、旅の前に「百科辞典」を見ることすら、普通はしないのではないか。そしてさらに、事前に幾何かの予備知識があれば、そしてそういう意識で旅に出れば、「現地」はさらに多くの物を、若い魂に与えるであろうと考えるからである。

現地で、事後に

萩の1日は、みぞれのような雨と寒さの1日であった。しかし元気に町へ出て行った生徒達は、「百科辞典」を超えるようなものを、いくつも見つけてきた。

萩には公害がない。つまり公害を出すような企業がない。従って長男だけが町に残り、若者は都会へ出て行く。町の人は若者をひきとめるような企業の誘致を

望んでいる。そして、若者をひきとめることのできぬ萩の町は、若者たちの旅行者であふれている。

松下村塾という、ひとつの小さな私塾が、あれだけ大きな革新のエネルギーを育てることができたのは何故か。現在自分達の受けている教育はいったい何なのか。生徒は事後の報告集に、次のように書いている。「思想のない学習の無意味さ、バカらしさが痛切に感じられました。今後は、目的のある人生を送りたいと思います。」

旅行者とはいったい何なのか。「僕らは萩へ何をしに行ったのだろうか。(中略)知らぬまに萩の生活系をこわしてきただけではないのか。あの日の雨で僕らはバスに乗った。そのために、バスで幼稚園へ行く園児が乗れなかった。『しかたないから待って下さい。次のバスまで。』馴れ合いのような運転手さんの口ふりが印象的だった。」

萩の町に、「猫の丁」という小さい細い道がある。誰も心をとめないその小さい町角で、ある生徒は悲しい猫の伝説を拾ってきた。「萩は歴史上の大きな出来事に関係した町だけれど、その萩の中の、小さな小さな出来事にも注目して、町を見るのもおもしろいと思われました。」

広島は、グループ毎の研究でなく、しかも時間が短くて、十分な成果が挙げ得たかどうか疑問です。しかし、原爆投下直後の貴重で生々しい8ミリを見て、まさに衝激を受けました。また、被爆者のお話をうかがうこともできました。

自らの肉体に原爆の悲惨を刻印している被爆者の、悲しみや怒りを浄化してしまったような淡々とした話しぶりを聞いていて、知識としてしか原爆を知らなかったわれわれは、かえって感情を揺さぶられるような感じがしました。「どうして自分たちだけが…」という、「情」から、「広島の意味」という「知」へと、恐らくそういう道行をたどったであろう広島の人々のお話を聞き、その逆の旅をしてわれわれは、ここで初めてヒロシマを体験したと言えるのかもしれない。峠三吉や、原民喜や、石垣りんや、そういうものを読む目や心は、きっと深まりを見せるに違いない。これも旅の意味であろう。